「円光院諸導師葬儀記録」

（「三条夫人葬儀目録(現代語訳)」）

この内容について、「信玄の妻　円光院三条夫人　上野晴朗　新人物往来社」の１８０ページから１８６ページの箇所を引用し、紹介する。

鎖龕

説三

鎖子を閉じ、焼香しながら申し上げます。円光院三条夫人は、およそこの世に聖なることがなきがごとくに、心を痛ましめ、愁いの思いが多い方であられました。

夫に仕え、要になる津(港)を定め、民心をたばねていかれたのに、船は目的地にむかってなかなか着こうとはしませんでした。

それなのに信仰の炎をもやされて、すべての煩悩をなくし、高い悟りの境地に達しておられました。

それはあたかも、月は明らかに、花は落ち、風光がごく自然であるように、夫人の人柄を示していたと思います。

掛真

大円

掛真をいまこうして拝見しますに、遺影の中にすべてのものが、亡くなられてもなお、留まっておられるのを感じます。

即ち、信玄公に対して妻の道をはずすことなく、まさに卓義卓爾として、その道に従っている様子が明らかです。あたかも慈しみ深く諸願を充してくれる、虚

空蔵菩薩のように、その信仰の炎が面影の中にあふれているのを感じます。むかしから画竜点睛とか、点仏晴という言葉があり、絵師がその眼を入れると、龍が天に飛び去ってしまう譬えのように、あたかもこの掛身も、娘として生まれ、母として人生を全うされた夫人が、双眼に点晴してもらったため、悲しいかな、遠い天の奥処に遷られてしまったのであります。

起龕　　桂岩

人間というものは、すこしの歩行(寸歩)も、自ら致すことはできません。結局は御仏の御力を借りねばならないのです。

この世の中には広漠たる一切の世界、宇宙空間のなかに、億の分身がありますけれども、すなわち、いま三条夫人もまた、八月の梅花となって、もはやこの世の人生に脅かされることもなく、来る春を告げるように遥かなる御仏に召し出されてしまわれました。

奠茶　　鉄嘴

かぎりある一碗の茶が、どうして人間の渇望をよみがえらせてくれるでしょうか。

しかし拙僧はいま点茶しながら、なお君(三条夫人)に勧めたてまつります。この世の人世には、はらばいゆく先に、必ず必ず救いの綱があるものです。

半桝の鍋の中にも、吹いて作りだす、人天一味の涼があることを忘れてはなりません。

奠湯

藍田

拙僧は四海を傾倒して、(世の中のすべてを傾けて)香湯を作って参りました。たった一匙ですけれども、阿娘(三条夫人)あなたにあたえようと思います。

この世の中は、草木叢林すべて禅の心によって結ばれた本草ばかりです。この世の天地のあるところ、そこには必ず霊光が輝いていると思って下さい。安心してこの奠湯をうけてください。

下火
快川

あなたは五十年の間、御仏の道を説いてまいりました。(転法輪)しかるに重陽の菊の節句に先立ち、涅槃にはいり、やわらかく透きとおった、真の御仏になられてしまわれました。

まさに三条家の明るく光り輝くともしびは、霊山の涙一色におおわれてしまったといえましょう。

それも人生五十年、常にうれい悲しむ、西方の一美人として貴女は存在しておられたのです。

諡名は円光院殿梅岑宗い大禅定尼

うやうやしく惟みるに貴女は朝廷に伺候する家筋、すなわち尊き家柄の華族の一員として、また女性としてお生まれになられました。

そして御人柄はまさに、円光日の如く、あたかも春の陽ざしのように、周りの者をやわらかく暖かく包む御気性であられました。

その御姿はまさに大いなる功力をもたれている観世音菩薩のように、相互関係をもった褒貶の世界の中のみにくいものを掃除し、洗い清めて下さいました。

唐の高宗の皇后であられた則天武后は、欲の深い俗界をためなおし導いて下さる、弥勒菩薩のようだといわれてきましたが、まさに貴女もこの世に桃源の境をつくろうと、民衆を撫育しておられました。

その歩みは常に最高の真理の認識の上に立って、知識の海をかかげひるがえして、衆生の心身が悩乱して踏み迷い、方向を見失っているのを、救ってやろうと、迷いを断ち切るように努力されていました。

それはあたかも、松風とツタカズラを通して見る月影のように、三条夫人の御裏方の様子は、常に夫につかえて礼法がととのい、経文の声が流れて、仏法を導いてくれる馬郎(仙女)の口を借りることもなく、自然に道を説いている姿が印象深く残っています。

その御様子は、常に身一つが薫草のように、梅花の匂いを室内に漂わせている思いがいたしました。いま

御仏に成られても、はるかなる龍宮に住むという龍王の姫のもとに参じてしまうこともなく、なお人間界にとどまって、女性のもつ五つの障りや、女性の守るべき三従の教えをよく説いて下さっているような思いに駆られています。

思えばそれだけに、御裏方には常に供養に御用いになる、種々のものが整っていました。それをまた慕って、武田家につながる御婦人方が貴女のまわりに集まってきて、御裏方には平和が満ち充ちていたように思います。

貴女はそのため、その御婦人方のためにも、たえず工夫をこらし、相談して、(商量)はかり考えて下さる方でした。

まさに三条夫人の仏法は、鴛鴦の仏法と断ずることができましょう。すなわち、夫武田信玄公との間は、比翼の契り、夫婦仲の睦まじかったことは譬えようもなく、常に仏法護持の信玄公のお考えにそって行動され、七宝に輝く堂舎のことなど考える暇もなく、正邪

を判別する認識の上に立って身を律しておられました。

そしてついに、臨済禅のなかで燃えつき、涅槃に逢着されてしまわれたのです。

やんぬるかな、悟りの境地を貫きとおされ、炎のような黒い輝きとなって、身罷ってしまわれたのです。

いま信玄公を中心とする、武田家のその歩みは、威風が千世界に遍き、その中にあって、夫人の遺徳を守る意気と心ばえが、婦女子の間に大地のようにしっかりと、正直に豊かに嘘いつわりなく、目的に向かって進んでいます。

だが、人生ははかない。たとえ、いかにそれを受用し、将来すといえども、生死の問題は常に岸頭にいるようなもので、未だ大作家の境地にはいたれません。

そこで山僧快川が、導師としてこの世のお別れに指図して陳べることにします。

火把子を以て火葬して曰く。看よ、看よ、国主徳栄軒信玄のもと、玉の如きもっとも傑出せる人を、棒喝

を加えて敲出する。

喝　一喝。

取骨

高山

御遺骨を入れる桶をおつくりいたしましたので、涅槃一路、新しい宇宙、造化の世界に旅立たれて下さい。

茶毘にふされましてもなお、今も八月の春を告げるように、梅花が香っております。

涅槃では釈尊の御母摩耶夫人が、灰を掃いて優しく見守って下さるでしょう。

三条夫人の美しき肌は、梅の精、好文木となられて、安身立命されるでしょう。

安骨

末宗

この世の閻浮、すなわち人間世界のなかでは、悟り切ってしまえば、もはや舎利をわざわざ金の酒瓶に入

れて蔵することもないくらいであります。

もともと閻浮の塵というものは、一把の骨頭を金槌にて打ち砕いたようなものです。とはいっても、三条夫人の場合は、同じ塵でも扶桑の塵に似て、仰ぎ見れば今もそこに富士の霊峰の雪の気高さが見えるように思います。